

「家がいいね」 第138号

いせ在宅医療クリニック 広報月刊紙

2015. 11. 9

「ふたり」から始まったこと

傷ついた癒し人としてのふたりのミチコさんが魂の交流をした経緯を讀みました。石牟礼さんは「苦界浄土」を書き一生を水俣の水銀中毒患



者さんに寄り添っています。彼女の呼びかけに応じ、息子の嫁がチツソ社長の孫という因縁を超え、両陛下は言葉も不自由な患者さんたちと直に面談し、心の声を聴き、触れ合われたのです。

「すべてのみえるものは、みえないものにさわっている。きこえるものは、きこえないものにさわっている。感じられるものは、感じられないものにさわっている。おそろしく、考えられるものは、考えられないものにさわっている。」

志村くくみ『色と糸と織と』『一色一生』 求龍堂

志村さんは91歳、染織と随筆に才を発揮され、右のノヴァーリスの言葉も見事に染め直しておられます。志村さん石牟礼さんのふたりも親交



が厚い。見えないものへの態度を共有する人は、深く静かに、違ふふたりに繋げてゆくのだなあと感じました。文化勲章授与式で、おふたりとは、どのような言葉を交わされたのでしょうか。

人は死を背負って生きている

柏木哲夫先生のお話を久しぶりに聴きました。時間を軸に、老いて死ぬ時に近づいていく、病を機に死から近づいてくると感じる、これは普段の我々の捉え方です。でも本質は常に死を背負って生まれるのが人間です。聴いていて中学生の自殺を思いました。心優しき彼ら彼女らが、なぜ親にも話さないのか。なぜ話すのは弱いことと思うのか、なぜ迷惑をかけるのが忍びないと思うのか。死を背負う定めを一人の責任にすると、その重さには大人でも耐えられないでしょう。自己責任？を教育の場まで持ちこんできたのは誰でしょう。

暮らしの中で最期まで生きる

人生の終わりでは、自然に逝くことも、普通ではありませんか。

ただ、自宅でも、施設でもそのような願いを言葉に出しにくいものです。

です。言葉を飲み込んで病院で亡くなる現状は、前号でも申し上げました。民家を改装して自宅と施設の中間に置いて工夫して運営できないものなのでしょうか。そのように、地域で看取るホームホスピスの役割が目に見えるようになってきました。11年前から宮崎市で、「かあさんの家」を継続している市原美穂さんの講演会があります。11月29日(日) 13時〜14時半、外宮前のシティプラザホール(2階)で、無料です。

病から詩が生まれる(認知症の場合)

認知症は、病気としての治療よりも、生活をどのように安定してケアできるかで、その困り事の様相が大きく変わってくるようです。大井玄先生は、穏やかに認知症の人と暮らす経験を多くお持ちです。自らの住む地域を、温かい気持ちで満たすためにも、この講演の機会をお見逃しなく。

12月12日(土) 15時半〜17時。日赤やまだホール、参加費500円。

認知症だからこそ穏やかに過ごすヒントは著作「人間の往生」「痴呆老人」は何を見ているか(いずれも新潮新書)、「病から詩が生まれる」(朝日選書)から。事前申込制、チラシに詳報。

クリニックの年末年始は

暦どおりに、12月27日

(日) から新年の1月3日

(日) までを休診します。

在宅患者さんには、その間も相談と対応をお約束します。



自宅での人生を
最期まで支援します

〒516-0805
三重県伊勢市御園町高向 927
電話 0596-20-8104
ファクス 0596-20-8105

メール homecare@kr.tcp-ip.or.jp
ホームページ <http://isezaitaku.com>

↑バックナンバーはここで閲覧可

